



菊池溪谷山開き神事

菊池温泉湧出60周年記念



第3回日本の名湯百選[®]シンポジウム2014

安心・安全・癒しの里 — 市民に愛される温泉地づくり

2014年10月31日(金) 11月1日(土)

熊本県菊池市菊池温泉 菊池市民広場特設会場 及び周辺旅館

- 【主催】 NPO法人健康と温泉フォーラム 日本の名湯百選[®]シンポジウム菊池実行委員会 (菊池市、菊池温泉観光旅館協同組合、菊池観光協会、菊池市商工会)
【後援】 全国市長会、全国町村会、地域活性学会、日本健康開発財団、日本温泉気候物理医学会、温泉療法医学会、熊本県、菊池市社会福祉協議会、熊本保健科学大学、熊本日日新聞社
【協賛】 菊池市商店会連合会、菊池菓子工業組合、菊池市食堂組合、NPO法人菊池まちづくり千年の風 熊本県社交飲食業生活衛生同業組合
【協力】 PHP研究所 ANAセールス株式会社

10月31日(金)シンポジウムと交流レセプション

13:30 開会セレモニー

14:00-15:00 記念講演会「料理と人生」道場六三郎(料理人)

15:00-16:30 パネルディスカッション
「安心・安全・癒しの里—市民に愛される温泉地づくり」

コーディネーター

合田純人 (NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事)

パネラー

笹本義臣(菊池市健康推進課長補佐)

渡辺純一(熊本県商工観光労働部観光経済交流局長)

上口昌徳(石川県山中温泉観光協会会長)

岩永 誠 (菊池温泉観光旅館協同組合代表理事)

参加温泉地宿泊券他抽選会

18:30-20:30 交流会(夕食会) (菊池市民広場特設会場)

11月1日(土) 日本の名湯百選[®]連携会議と視察・エクスカージョン

8:30-11:00 第3回日本の名湯百選[®]連携会議(於:望月旅館)

コーディネーター

合田純人 (NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事)

連携温泉地代表報告他

11:00-11:45 総括講演

「日本の名湯百選[®]—まちづくり・ひとづくり」

谷口江里也(ヴィジョンアーキテクト・建築家)

11:45-14:00 閉会式 昼食・湯中運動視察

14:15 エクスカージョン (至 大分県長湯温泉)

菊池温泉湧出60周年記念

第3回日本の名湯百選[®]シンポジウム2014

安心・安全・癒しの里 — 市民に愛される温泉地づくり

10/31 13:30 開会式



■歓迎挨拶

江頭 実
熊本県菊池市長



■歓迎挨拶

笠 愛一郎
菊池市商工会 会長

第3回日本の名湯百選。シンポジウムが、全国の「名湯」温泉地の皆様、そして温泉関係者の皆様を多数お迎えして開催できますことに感謝いたしますとともに、菊池市民一同心より歓迎申し上げます。

さて、菊池温泉は昭和29年10月30日の湧出から、本年60周年を迎えたところであり、まだまだ歴史的には浅い温泉です。当時の隈府町商工会が、まちを観光都市として発展させるために温泉を掘削しようと立ち上がり、その熱意に賛同した多くの有志たちより集められ資金をもって掘削工事が行われ湧出をみたものです。

現在菊池市では、「日本一の桜の里づくり」「日本一のホテルの里づくり」「森の中のまちづくり」の3つを柱として、「癒しの里 菊池」の実現に向け、官民一体となった取り組みを進めております。

アルカリ性の泉質で、「美肌の湯」「化粧の湯」と呼ばれる菊池温泉は、貴重な観光資源であるのみならず、豊かな自然、清らかな水、安心・安全の美味しい農産物、中世を駆け抜けた菊池一族の歴史や文化などと一緒にすることで、心身の健康を回復し「癒しの里 菊池」を作りあげていくためにもなくてはならないものであります。

湧出60周年の記念の年を迎えるこ菊池で、全国から先進的な取り組みをされております名湯百選温泉地の皆様とともにシンポジウムを開催できますことは、私どもにとりまして大変有意義であり、また良いチャンスでもあると感じております。

このシンポジウムを契機として、特に「癒し」や「健康」という観点から温泉地間での連携や情報交換などを行いながら、それぞれの温泉地の活性化が促進され、賑わいが生まれるような取り組みがなされることを期待するものであります。

結びに、本シンポジウム開催にあたり御尽力いただきました関係各位に敬意を表しますとともに、全国各地から御参加いただきました皆様の御健勝と各々の「名湯」温泉地の更なる御発展を祈念申し上げ、歓迎の御挨拶といたします。

第3回日本の名湯百選。シンポジウムがここ菊池温泉で開催されることを大変うれしく心より歓迎申し上げます。

点在する棚田、谷間を縫って流れる菊池川。この季節、いたるところにある柿の木に熟した柿が実り、彩りを添えています。特別な風景ではありませんが、その穏やかさはまさに日本の原風景であります。

菊池市は、日本の名湯百選に認定された菊池温泉はもちろん、菊池渓谷や桜、コスモス、ホテルなどの四季を彩る自然や菊池一族の歴史と伝統を物語る、温泉と水と緑、そして田園文化のまちとして発展してきました。

菊池温泉は湧出から60年とまだ歴史の浅い温泉です。バブル期、団体客で賑わいをみせた時期が過ぎると観光客は激減し危機感が漂い始めました。それでも、夢を持ち、頑張っていくという思いを持ち続けました。チャンスはピンチの顔をしてやってくるのです。そして日本の名湯百選の認定を受けた温泉地としてまさに今、第3回日本の名湯百選。シンポジウムを開催し、同時に「菊池温泉湧出60周年記念温泉感謝祭」を実施して新たな一歩を踏み出したところでありました。

この風景にもあふれんばかりの光と澄んだ空気が漲っていて、思わず深呼吸したくなる、いで湯の里菊池。私たちの自慢の温泉を、様々な取組を展開されておられる全国の名湯百選の皆様へ、文字通り肌で感じていただければと思います。

結びに本シンポジウム開催にあたりご尽力いただきました関係各位に深く感謝申し上げますと共に、全国からお見えになった皆様の思い出のページとして、深く心に刻まれる大会となりますことを祈念し挨拶とさせていただきます。

14:00-15:00 記念講演 「料理と人生」



道場 六三郎
料理人

15:00-16:30 パネルディスカッション 「安心・安全・癒しの里 - 市民に愛される温泉地づくり」

■コーディネーター 合田 純人 (健康と温泉フォーラム常任理事)



パネラー
笹本 義臣
菊池市健康福祉部健康推進課課長補佐

市民の健康と菊池温泉のつながりは、平成15～16年度に実施した「温泉を活用した健康づくり」事業にはじまる。旅館ホテルの理解と協力を得、温泉を活用した湯中運動と広間を使った筋トレを中心に市民の健康づくりを推進した。本事業の成果として、参加者の医療費の低減、歩行の改善などの身体的な効果が確認できた。現在も自主サークルとして活動している。

近年、死亡原因の6割が「生活習慣病を起因とする病気」であると厚生労働省より発表された。また、少子高齢化の対策のひとつとして健康寿命の延伸が取り上げられている。現在、菊池市では、生活習慣病の改善に主眼を置いた「健康づくりプロジェクト」を立ち上げ、地域資源を活用した市民の健康づくりを開始した。この地域資源のひとつが「菊池温泉」である。

これまで実施してきた湯中運動等ほもとより、温泉街を含む中心市街地をフィールドとしたウォーキング、併せて街中に点在する足湯も活用しながら市民の健康づくりを進める。本プロジェクトには、旅館ホテルのほか、「商工会」も新たに参画し、医療機関である「菊池養生園」がメディカル面をサポートする。温泉と温泉街を中心としたソーシャルキャピタルの醸成を図りながら、健康づくりネットワークの構築を目指している。



パネラー
渡辺 純一
熊本県商工観光光栄労働部観光経済交流局長

熊本県は、源泉数全国第5位を誇る温泉王国であり、熊本の温泉は健康と癒しをもたらす贅沢な「おふる」です。特に、熊本の「おふる」は、そのほとんどが「美肌の湯」「癒しの湯」「子宝の湯」に大別でき、女子向けの泉質がズラリと揃っています。

熊本県では、平成25年10月に、この「おふる」の魅力を全国に“ふるモーション（プロモーション）”する特命チーム「くまもと・ふるモーション課（通称：ふるモ課）」を設立しました。ふるモ課では、これら熊本の「おふる」情報と県内の入浴施設約350件の情報を一冊に網羅した「くまもとおふる読本」の発行や、本年6月にふるモ課課長代理に就任したレイザーラモンRG氏が出演するweb動画「レイザーラモンRGと学ぶおふるの流儀」等を通し、全国に熊本の「おふる」の魅力をPRしています。また、ふるモ課では関係団体と連携し、杖立温泉の蒸し湯を活用した「杖立流 Neo 湯治プログラム」や、温泉と糖質をコントロールした美味しい食事等を組み合わせる「阿蘇・内牧温泉・美♥UPプログラム」、「くまもと・ふるモーション温泉天国のたび」と称する日帰りバスツアーの催行等、熊本の「おふる」の機能を存分に味わっていただける様々なプログラムを開発（販売）しています。



パネラー
上口 昌徳
石川県山中温泉観光協会 会長

「温泉と温泉文化の地の未来」

私は今迄一度も菊池の地を訪れたことはない。しかし曾つて私の山中温泉を訪れた菊池温泉の繁栄を夢見る皆さん、更にこの数年間異常な位、菊池温泉の蘇生を願ひ熱心に私に語りかけ続ける畏友合田純人さんを通じ菊池の地の未来性ある多くのことを知りました。即ち九州に在って権威ある歴史の地であること、豊かな自然が守り続けられていること、火山国日本に神が与えてくれた豊かな温泉がこんこんと湧き出ていること等知らされました。湧出から60年余、温泉地としての貴重な歴史を紡いで来られたことも合田純人さんから詳しく聞かされました。

私は今、温泉観光地が21世紀を生き抜くためには人間が自然の中でゆったりと生きた原点に戻って未来を見つめなくてはならない余りにも大切な時にあると思えます。私達は私達生き者の神である地球という自然から奪い取ること総べての時代から新しい生き方を創り出さなくてはならない。ゆつたりと歩む新しい時代、火山国日本の天与の温泉を通じ社会に大きな奇香を為す時を迎えています。

温泉がより健康であり続ける長寿社会への貢献、心身の癒し、いこいを求める都市生活者への温泉文化の果す役割はあまりにも大きいのです。国が唱える「地方創生」そのものです。古代より「湯治」の名のもとに心身の癒しの場として温泉を大切にされて来た原点への回帰です。

結びに、温泉文化観光地が21世紀の明るい展望の地となるか否かは最後はそこに住む人達が運命共同体（コミュニティー）として共有の理念をもつことだと信じます。「全体の繁栄があって結果として個の繁栄がある」「旅人の歓迎が糧」こんな思いを共有する皆様であっていただきたいと願っています。

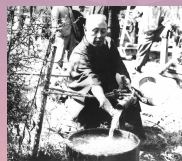
「夢ハ夢ト思ウ人ニ夢ハ夢」



パネラー
岩永 誠
菊池温泉観光旅館協同組合 代表理事

菊池温泉は、無色透明で無味無臭、アルカリ性の泉質で、癖のない泉質が特徴です。美肌の湯、化粧の湯などと呼ばれ、特に女性に人気があります。雑誌や旅行代理店などが行う人気投票では、常に泉質で上位にランクインするほど。さらに自然環境に恵まれた療養・保養に優れた温泉地として「日本の名湯百選[®]」にも選ばれました。現代人の多くが求めている癒やし効果の高い温泉地として期待が高まっています。

宿泊客の数は平成元年あたりをピークに年々減り続けています。昔は「宴会型」の団体客でにぎわっていましたが、今は個人や少人数でゆっくりしたいという「保養型（＝癒やし）」の観光客が増えてきています。そのニーズに応えるためには、日本名水百選や日本の滝百選、日本森林浴の森百選などがある菊池渓谷、安全・安心な食、日本の名湯百選[®]などの観光資源を組み合わせてPRしていくことが重要です。飲食業、観光業、行政など各関係団体が連携し、地域観光の肝となる住民の力を取り込みながら、観光振興に取り組んでいくことが求められています。



第1回日本の名湯百選[®]シンポジウム
石川県加賀市山中温泉
2012年9月26日-27日



第2回日本の名湯百選[®]シンポジウム
長野県上田市鹿教湯温泉
2013年11月27日-28日

11/1 8:30~11:00



「日本の名湯百選」 連携会議



コーディネーター 合田純人 NPO 法人健康と温泉フォーラム常任理事

死を身近に感じた時、生を強く意識することがある。

東北大震災の被災地で自然の脅威を感じながら救助にあたった隊員たちを癒し、「あ〜〜生き返る」と湯船でつぶやく若い隊員たちを毎日繰り返す厳しい任務に立ち向かう力を与えたのは東北の名もない温泉であった。温泉の持つ不思議な力、人間を再生する力は昔からよく言われているが、その仕組みやメカニズムは実はあまりよくわかっていない。温泉療養は戦後の近代医学の目覚ましい発展とともに忘れ去られようとした時期があったが、薬物や外科手術などの対処療法中心の近代医学の限界が見えるとき、人々は自然の慈悲としての温泉の不思議な回復力を実感することがある。その温泉の力は、老化防止や、皮膚疾患や自律神経不調の回復、あるいは生命の源というべきか心身の生きる力そのものを甦生してくれる。人々が温泉に浸かると言う行為は、生命の根源に帰納することであり生命に帰ることにより、計り知れない癒しと安心感が再生される。

日本の名湯百選は20数年を経て、ありきたりの温泉のあり方を捨て、その進化の方向性を、人々の心のなかに、そしてその心を包み込む空間の有り様に求めようとしている。そして、そうした概念を共有する温泉地間の交流がさらに加速されれば、健康長寿を支えるひとつのネットワークとして新たに日本の名湯百選が評価される時代が来ると期待している。

11/1 11:00~11:45

総括講演 「日本の名湯百選」一まちづくり・ひとづくり



谷口江里也(ヴィジョンアーキテクト エリアス クリエイティブ スターシップ代表・建築家)

これからの時代の豊かさを求めて

私たちの社会はいま、世界的に、大きな曲がり角をむかえています。二百年ほど前から始まった、近代という時代では、国家は産業を富ませることで国民の生活を豊かにするという方向性を押し進めてきました。そのことによって私たちの社会に物質的な豊かさがもたらされましたけれども、同時に、大量生産、大量消費の大きな流れによって生じてきた大きな問題、すなわち食料、資源、エネルギーや廃棄物処理など、多くの地球的な課題をもたらしました。

また、中央集権的な国家モデルと、それに基づく政策によって、都市への人口の集中も進み、かつては個性豊かだった地域性も次第に失われていきました。これからは、中央と地域の役割のありようを見直すとともに、大きな産業に依存したり、拡大成長幻想のなかで、蜃気楼のような豊かさを追うのではなく、自分たちの足元にある豊かさや風土に合った個性的な働きや街のありようを見つめ、それを、地域住民と行政とが一体となって育てていくべき時代です。住み良いふるさと、誇りの持てる街づくりが、そこから始まります。



谷口江里也 & ECS の
空間プロジェクト遂行の
基本的なプロセス

